

# JAPN MEN'S SOFTBALL

2020  
June



日本男子ソフトボールの未来のために

*for the future of Men's Softball in Japan*

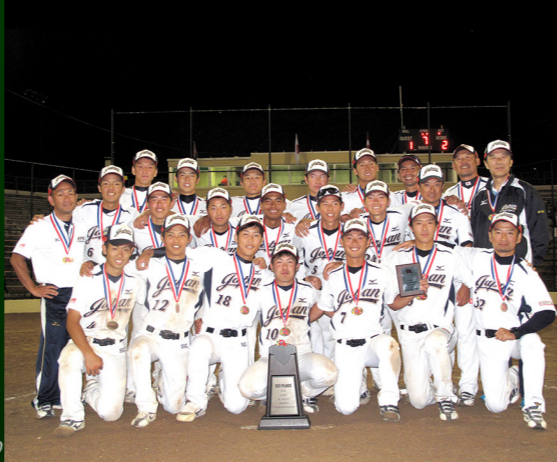




1		JAPAN	▲2	3743	PTS
2		ARGENTINA	▲3	3737	PTS
3		NEW ZEALAND	▼2	3421	PTS
4		CANADA	▼2	3218	PTS
5		AUSTRALIA	▼1	2983	PTS
6		USA	—	2833	PTS
7		CZECH REPUBLIC	—	2250	PTS
8		MEXICO	▲1	1678	PTS
9		VENEZUELA	▼1	1608	PTS
10		SOUTH AFRICA	▲2	1473	PTS
11		DENMARK	—	1322	PTS
12		BOTSWANA	▲1	1186	PTS

AS OF 06 JANUARY 2020

2016年 世界ジュニア選手権優勝



今や日本は男女ともに「世界を引っ張る」存在  
これからは「私たち」が世界のソフトボールをリードしていく



# 日本の男子ソフトボールが 「世界ランキング1位」に!!

2020年1月15日に発表されたWBSC(世界野球ソフトボール連盟)男子ソフトボール「世界ランキング」で、日本が長年ランキングトップに君臨していたニュージーランドを抜き、「1位」の座を獲得するという嬉しいニュースが飛び込んできた。

2019年 世界選手権準優勝



文字通り、日本男子ソフトボールのTOPカテゴリーである「男子TOP日本代表チーム」は、現ヘッドコーチの岡本友章氏が現役選手時代「日本の4番」「主砲」として活躍した1996年の「第9回世界男子選手権大会」で、当時「世界の3強」と呼ばれたニュージーランド、カナダ、アメリカの一角を崩し、初の「3位」入賞。続く2000年の「第10回世界男子選手権大会」では「世界最強」ニュージーランドを一度は破り、決勝進出。決勝でも先手を奪い、王者・ニュージーランドをギリギリのところまで追いつめての「準優勝」と、「世界の頂点」を争い、「世界の強豪の仲間入り」を果たしてみせた。だが……その後は「ベスト8」という高く厚い壁に跳ね返され続け、世界選手権の舞台では5大会連続5位。上位進出を阻まれる「苦闘の時代」が続いた。

その日本の男子ソフトボールに2016年、「転機」が訪れる。

男子TOP日本代表の「弟分」である「男子U16日本代表チーム(現・男子U18日本代表チーム)」が「第2回世界男子ジュニア選手権大会(現・男子U18ワールドカップ)」で「エース」小山玲央(当時・佐世保西高)・現日本体育大を中心に、予選リーグ・決勝トーナメントを通じて「無敗」のまま頂点へ登り詰め、「35年ぶりの世界」に輝いたことが悪い流れを一変させる契機となった。

昨年6月の「第9回世界男子選手権大会」では、「ニュースター」小山玲央の出現に「刺激」を受けた「日本男子ソフトボール」は始める。

「逸材」小山玲央が順調に成長し、ジュニアからTOPカテゴリーへステップアップ！男子TOP日本代表の一員に加わると、チームも各種国際大会で「結果」を残し始める。

また、ジュニアカテゴリーも世界の舞台で常にメダル圏内「上位」をキープ。

2016年の「第2回世界男子ジュニア選手権大会」優勝を成し遂げた後、2018年の「第2回世界男子ジュニア選手権大会」準優勝を経て、今年(2020年)の「第3回男子U18ワールドカップ(※U16世界選手権から年齢区分・大会名称を変更)では見事「全勝優勝」を飾り、王座奪還！1981年の第1回大会、2016年の第2回大会に続き「3度目」の「世界1位」を勝ち取り、日本男子ソフトボールの立ち位置を改めて「誰もが納得する」堂々の「世界ランキング1位」に押し上げてくれた。

ジュニア・TOP両カテゴリーの「躍進」によって、男子ソフトボール「世界ランキング1位」を獲得した日本。その「榮譽」に輝いたという「事実」は、同時に、「世界ランキング1位」のチームとして果たすべき新たな「使命」「責任」が課せられたということでもある。

男子TOP日本代表は来年(2021年)の「WBSC第1回男子ワールドカップ(※世界男子選手権大会から改称)」で「初優勝」の栄冠を手にし、名実ともに「世界1位」となること。その他U18、U23のカテゴリーにおいても常に世界のソフトボールの「最先端」を走るトップランナーとして大きなインパクトを残し続ける存在となることが求められている。







# 偉業 JAPAN

2019年度WBSCソフトボールディビジョン「ベストプレイヤー賞」受賞

昨年11月19日〜22日、大阪府堺市で開催された「WBSC総会」において「WBSC殿堂入り」「WBSCベストプレイヤー賞」の発表が行われ、(公財)日本ソフトボール協会から推薦されていた岡本友章、齋藤春香、高山樹里の三氏が「プレイヤー」の部門で「殿堂入り」。松田光選手が2019年度WBSCソフトボールディビジョンの「ベストプレイヤー賞」に輝いた。



# 快拳

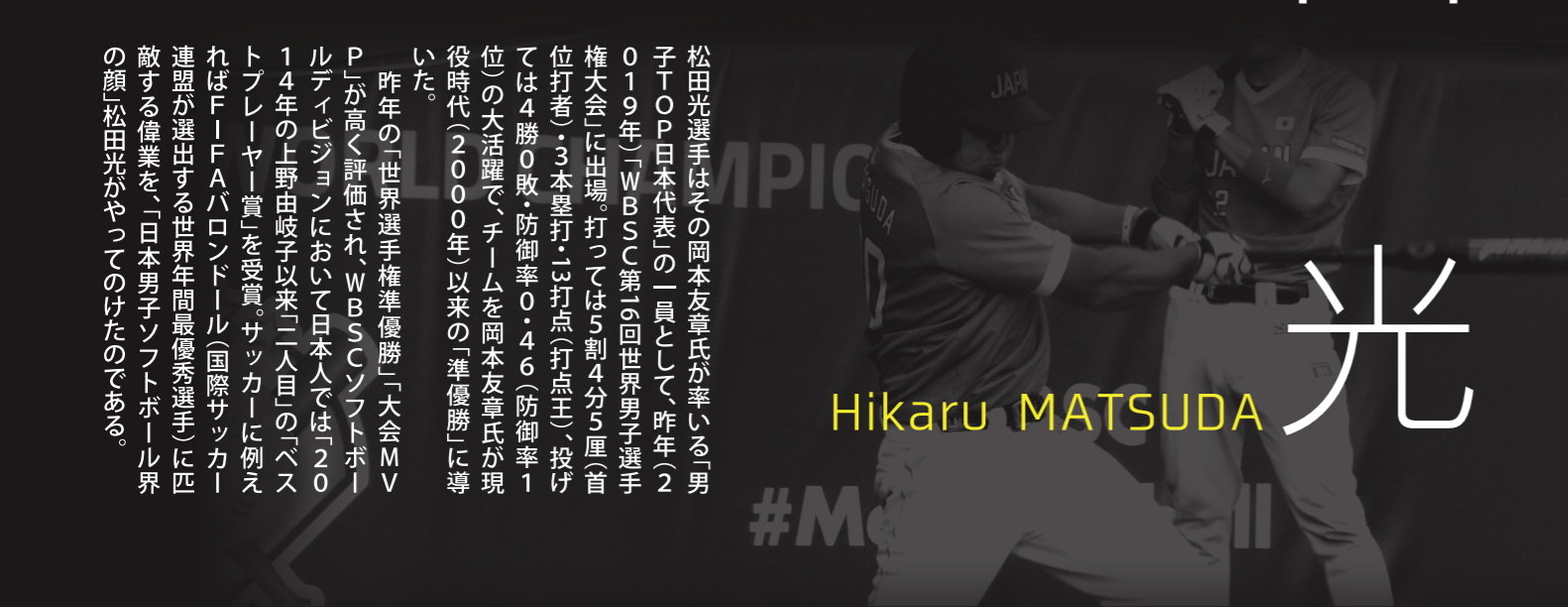
プレイヤーとして日本人三人目「国際殿堂入り」



# 松田



# 岡本



# 光

Hikaru MATSUDA



# 友章

Tomoaki OKAMOTO

岡本友章氏は現在(公財)日本ソフトボール協会選手強化本部会・男子強化委員長、男子TOP日本代表ヘッドコーチ(監督)の要職にあり、現役時代「世界選手権(現・ワールドカップ)」に3回出場。3位(1996年)・準優勝(2000年)の成績を収め、男子日本代表の「黄金時代」を築き上げた。かつての「日本の4番」「主砲」であり、「世界に通用する強打者」として名を馳せた岡本友章氏。日本人離れた「パワー(パンチ力)」を活かした「発・長打」が最大の武器で、随所に見せる「勝負強さ」もまさに一級品。全盛期は世界屈指の好投手相手に「こそぞー」の場面で痛打を浴びせ、バット一本で世界を震撼させた。とも評された。「プレイヤー」としては三宅豊、西村信紀に続き「日本人三人目」の国際殿堂入りとなる。

松田光選手はその岡本友章氏が率いる「男子TOP日本代表」の一員として、昨年(2019年)「WBSC第19回世界男子選手権大会」に出場。打っては5割4分5厘(首位打者)・3本塁打・22打点(打点王)、投げては4勝0敗・防御率0.46(防御率1位)の大活躍で、チームを岡本友章氏が現役時代(2000年)以来の「準優勝」に導いた。昨年の「世界選手権準優勝」「大会MVP」が高く評価され、WBSCソフトボールディビジョンにおいて日本人では「2014年の上野由岐子以来「二人目」の「ベストプレイヤー賞」を受賞。サッカーに例えればFIFAバロンドール(国際サッカー連盟が選出する世界年間最優秀選手)に匹敵する偉業を、「日本男子ソフトボール界の顔」松田光がやってのけたのである。





男子ソフトボール活性化担当：新井千浩氏

## 日本男子リーグ活性化のための提案

- 全18チームを成績・特徴等に応じて「グループ分け(それぞれネーミングする)」し、リーグ構成の明確化やメッセージ性のアップ、活性化を図る
- 観客の分散・偏りをなくすため、節の開催の際は各グループ「1会場での開催」とする
- 観客スタンド等、設備が十分に整った球場ですべての試合を実施すること。選手・観客の環境を整備するとともに「全試合有料制」とし、日本リーグの価値を高めていく

2019年男子TOP日本代表「世界選手権準優勝」、2020年男子U-18日本代表「ワールドカップ優勝」が「良い契機」となり、日本の男子ソフトボールのさらなる普及・発展のため様々な「仕掛け」「取り組み」が進められている。もちろん、日本リーグだけではなく、ジュニア世代(子どもたち)の育成・強化、ソフトボールの大衆性、といったところにも目を向け、様々な施策を展開していく予定である。

男子ソフトボールという競技(スポーツ)を皆で守り、育てていけるよう……  
この「男子ソフトボール活性化」を合言葉に「未来」を創造していく必要がある。

「男子活性化プロジェクト」の今後の構想としては、来年度(2021年度)「新日本男子リーグ発足」をめざし、その運営案を企画・検討しており、男子TOP日本代表ヘッドコーチでもある岡本友章プロジェクトリーダー、新井千浩事務局員が中心となって

※全18チームを成績・特徴等に応じて「グループ分け(それぞれネーミングする)」し、リーグ構成の明確化やメッセージ性のアップ、活性化を図る

※観客の分散・偏りをなくすため、節の開催の際は各グループ「1会場での開催」とする

※観客スタンド等、設備が十分に整った球場ですべての試合を実施すること。選手・観客の環境を整備するとともに「全試合有料制」とし、日本リーグの価値を高めていく

こと等を提案し、その実現へ向け、各所に働きかけている。

## 自らの力で 男子ソフトボールの「未来」を創造



現在、(公財)日本ソフトボール協会では「東京2020オリンピック」での、金メダル獲得をはじめとする多くの重点目標が掲げられているが、女子だけでなく、「男子ソフトボールの活性化」にも鋭意取り組んでいる。

一昨年(2018年)3月には、「第1回日本女子リーグ1部開幕節(愛知県名古屋市/ナゴヤドームにおいて開催)」初日の試合終了後、男子ソフトボールの「PR」「活性化」を目的とし、初の試みとして「男子エキシビジョンマッチ(SPECIAL MATCH)」を開催。



# 男子ソフトボール 活性化 をめざして for the future of Men's Softball

日本男子リーグ選抜(※2017年「第5回世界男子選手権大会」に出場した「男子TOP日本代表」の主力選手のほとんどが顔を揃える「日本最強」メンバーで構成)と全日本大学男子選抜(※「Next Generation」)、「次代の日本代表」ともいべきチーム。2016年「第2回世界男子ジュニア選手権大会」で5年ぶり2度目の「世界1」に輝いた「黄金世代」の選手たちで構成がぶつかり合う「夢の対決」が行われ、約3000人の観客を魅了した。

昨年(2019年)の男子TOP日本代表「世界選手権準優勝」の際には、「6年ぶりの快挙を記念して「特別ポスター」を制作。同秋開催された全日本総合選手権で出場全チームに配布し、大会での準優勝を報告したことはもちろん、その後の日本リーグ決勝トーナメントの集客アップを図るべく「広く」男子ソフトボールを「PR」することに活用した。

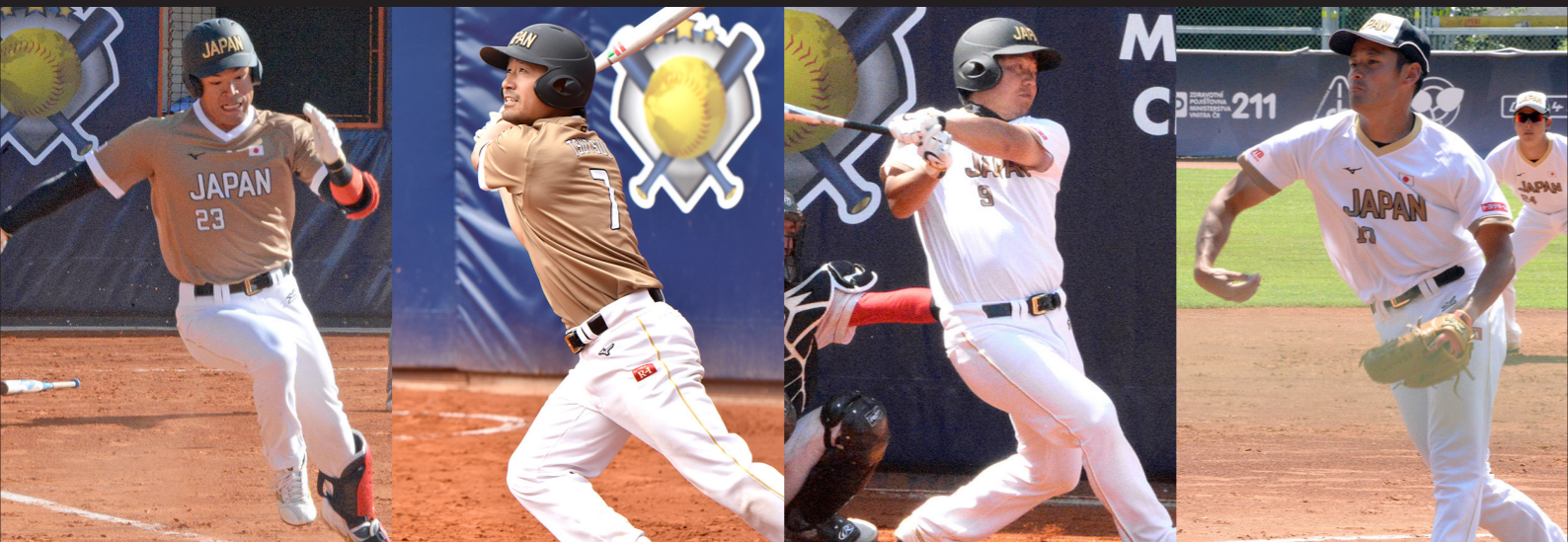
また、早くから「PR」に努めた「第48回日本男子リーグ決勝トーナメント(愛知県名古屋市/パロマ瑞穂野球場において開催)」でも、メインとなる試合観戦以外に観客の皆さんが、来場して楽しめる「イベント」を多数用意。

現在、平林金属株式会社より(公財)日本ソフトボール協会事務局へ出向し、「男子ソフトボール活性化担当」として奔走している新井千浩氏が自ら企画・立案し、①入場者大抽選会 ②日本男子リーグ限定グッズプレゼント ③大会パンフレット購入者対象サインボール抽選会 ④準決勝・決勝での選手サインボール投げ入れイベント ⑤フードキッチンカー多数出店 ⑥ショップブース出店等、どれも「日本男子リーグ初の試み」を積極的に実施。来場者から好評を博した。がある。



2018年に開催された「男子エキシビジョンマッチ」





# 2021年男子ワールドカップに向けて

## 日本代表としてのプライドを胸に、「勝利の追い風」に乗る

昨年(2019年)の「世界選手権準優勝」、今年(2020年)の「U18ワールドカップ優勝を経て日本男子ソフトボールがめざすところ……それはもちろん、来年(2021年)2月にニュージーランド・オークランドで開催される「WBSBC第17回男子ワールドカップ」での「初優勝」「世界一」である。

当然、「現・世界ランキング1位」の日本には世界の強豪たちがこれまで以上に、牙を剥いて、立ち向かってくることだろう。

だが、今の日本にはそれに怯まぬ「確かな実力」と「若い力の台頭」がある。

投手陣はこのたび「WBSBCベストプレイヤー賞」を獲得した「日本男子ソフトボール界の顔」松田光(平林金属)が「大黒柱」として君臨していることはもちろん、2016年の「世界ジュニア選手権優勝」から年々着実に「レベルアップ」「進化」する「ニュースター」小山玲央(日本体育大)がいる。小山玲央が投じる快速球のMAX(最高球速)は今や世界の強打者も手を焼く「135キロ」。ライス(浮き上がるような変化球)・ドロップ(落ちる変化球)に磨きをかけているのももちろんのこと、打者の手元で横に滑るように落とすカットボール等「新たな球種の習得」にも成功。自らの「引き出し」を増やし、より「つかまえるに」投手へと成長・変貌を遂げている。

元オーストラリア代表で2001年の世界ジュニア選手権・2009年の世界選手権と二度世界を制し、世界最高のサウススポーと称されたアンドリュー・カークパトリック(※2009年から日本リーグ・ダイワアクトに所属)も「コヤマ」は今、「世界ナンバー1の投手」だと絶賛。世界選手権歴代最多7度の優勝を誇り、世界最強軍団と呼ばれてきた「ニュージランド代表」(※ブラックソックス・男子「ニュージランド代表チーム」の愛称でさえ「コヤマ」の名前がコールされると顔色は青ざめ「お手上げ……」の苦手意識を抱くほど、その存在感は際立つ。

体格・パワーで勝る海外の打者を「真つ向勝負」で抑え込める日本人投手はあの「西村信紀(にしむら・のぶのり)」(※世界選手権出場5回。男子日本代表の「エース」として1996年世界選手権3位、2000年世界選手権準優勝を成し遂げ、男子日本代表の「黄金時代」を築く立役者となった「国際殿堂入り」の往年の好投手)以来久しく出てきていなかった。しかし、小山玲央なら、小山玲央がいれば……「世界の頂点を狙える」そう確信させてくれる「逸材」が現れたこと、その「存在」が「日本男子ソフトボール界の顔」松田光の「本来持っている力」を引き出し、「良き競争相手」にもなり、これまで松田光が一人で背負ってきた「俺がやらなければ……」という大きなプレッシャー、肩の荷を降ろさせてくれたということが非常に大きい。松田光と小山玲央の「化学反応」「相乗効果」が「今の日本」の最大の強みになっているといっても過言ではないだろう。

また、小山玲央以外にも「若手」は台頭してきている。U18日本代表時代、小山玲央とともに「球速125キロ超え」の「二枚看板」として注目され、その後も小山玲央とは互いを高め合う「良きライバル」関係であり続ける長井風雅。その長井風雅の「チームメイト」であり「後輩」ながら、「エースの座」を争い、「切磋琢磨する期待の本格右腕」大西泰河(ともにHonda)。2018年世界ジュニア選手権でU18日本代表の「エース格」として好投し、準

優勝に大きく貢献。所属チーム(トヨタ自動車)でも「次代を担う投手」として期待され成長を続ける小野寺翔太ら「可能性」秘めた投手たちがいる。

これは、野手においても同じ。現男子TOP日本代表ヘッドコーチの岡本友章氏が「世界に誇れる日本の4番」と太鼓判を押す「野性味」「迫力」あるスラッガー・大石司(Honda)。類稀な「身体能力」と抜群の「センス」を活かした走攻守で周囲を惹きつけ、今年1月3月にはソフトボール王国・ニュージーランドで武者修行、男子TOP日本代表 攻守の新しいリーダーとして飛躍中の宇根良祐(平林金属)。同じく男子TOP日本代表 期待の若手として売り出し中であり、その宇根良祐とは「遊間コンビ」を形成。日本代表 所属チーム(平林金属)でも「チームメイト」ではあるが、「ライバル」として強く意識し、競い合う八角光太郎ら「今後が楽しみ」な選手たちが多い。

繰り返すようだが、今の日本男子にはこうした「確かな実力」と「若い力の台頭」がある。今回「U18」で世界を制した「若き戦士」たちが今後さらに成長を遂げ、TOPカテゴリーで代表争い、レギュラー争いを繰り広げてくれるようになれば……チームはさらにレベルアップし、念願の初の「世界制覇」に近づけることになる。

その一方で、2017年〜2019年にかけて長らく「エースでキャプテン」の重責を担ってきた高橋速水、その女房役の片岡大洋(ともに高知パシフィックウエーブ)、昨年の世界選手権では「要所」「こころ一番」で「チームを救う働き」を見せてくれた筒井拓友(大阪桃次郎)や浦本大嗣(Honda)ら「ベテラン」の存在も見逃せないし、思い切りの良いプレイでチームを支えた森田裕介(豊田自動織機)、黒岩誠玄(トヨタ自動車)らの「中堅組み」もまだまだ「日本代表」の座を譲る気はないはずである。「若い力の台頭に張り合う存在、その前に立ちほだかるような壁」があつてこそ、チームは真に強くなる。そして……「ベテラン、中堅、若手の「融合」によって、その力はもっとも増幅していくはずである。

現在、日本男子ソフトボールが「世界一」を狙える位置にあるのも、これまで多くの「先人」が「世界の舞台」に挑み、戦ってきた「歴史」があるからである。男子日本代表の「プライド」を胸に、どんな逆境にも屈することなく、世界の強豪に「挑戦」し続けてきた。そんな「日本代表の先輩たち」の歴史・伝統の延長線上に彼らは立っている。「世界の頂点」に限りなく近づき「希望の光」が差し込んでいる。今、このときも、5大会連続5位と挑んでは跳ね返され「苦しみ、耐えた」あのときがあつてこそ、どんなときも「チャレンジ」し続けて……男子TOP日本代表は再び「躍進」のときを迎えている。

2021年の「WBSBC第17回男子ワールドカップ」で日本男子史上初の「優勝」「世界一」を勝ち獲れるだけの「陣容(顔ぶれ)」は揃っている。あとはその目標に向けていかに意識高く、日々の努力を積み重ねていけるか。今、日本の男子ソフトボールに吹く「勝利の追い風」に乗って……来年2月の男子ワールドカップも「期待」してほしい!!

